

追悼特集

マヌエル・ アグヘータ ヒターノの歌

2015年12月25日クリスマスの日に、ヒターノの中のヒターノ、マヌエル・アグヘータが旅立った。カルロス・サウラの映画「フラメンコ」で、眼光鋭い風貌と血が滲むような歌声で衝撃を受けた人も多いだろう。一度観たら忘れられない強靱な存在を讃え、ここに追悼特集を捧げる。

MANUEL AGUJETAS

文・車敏子
写真・編集部

写真「フアン・カルロス・トロ、パコ・マンサネロ、ドミニク・アベル、パコ・サンチェス、マヌエル・アグヘータ、フエンテ・チャゴン」
音楽資料：Claro (フエンテ・アグヘータ 24キラーズ(2001))
語り：ドミニク・アベル (dominiqueabel.com)、エスカラ・サウラ、アントニオ・ワト、フアン・カルロス・トロ
撮影：Kris Hyslop

Fotos por Juan Carlos Toro, Paco Manzanero, Dominique Abel, Paco Sanchez y Manuel de la Fuente Chacon

Documentación: "Manuel de los Santos, El Agujetas 24 Quilates" (2001).

Agradecimientos especiales a Dominique Abel (dominiqueabel.com), Estela Zetania, Antonio Soto, Juan Carlos Toro.

© Juan Carlos Toro

コロンビア・マヌエル・オス・ルイスの真実
でアルバムを録音する機会に恵まれ、
ヘレスを後にし、マドリッドへと旅を
移します。そして、プロとしての本格
的な活動を開始しました。

「タブラオは好きじゃなかったし、ベ
ーニャで歌うのもいやだった。特に、
酔っ払いの姿に歌うのは我慢ならな
かった」

とは言うものの、バーニャやタブラ
オ「カフエテ・チータス」に出演を
重ね、マドリッドのアネホ劇場、マ
ノロ・イシドロ・サンルーカル、ギタ
ー・サイタル・シリウスを行い、72年
には「マヌエル・トリネ国家賞」、そし
て77年にはヘレスの「フアン・ロドリ
グ・カンチ国家賞」を受賞しました。

その後アメリカへと旅立ち、ニー
ヨークで活躍。その流れからメキシコ、
日本、オーストラリア、フランスと、歌い
ながら世界中を回ります。そして80年
代半ばには、カサス・ロタに手作り
の家を建てて、マドリス・ベインに腰を
落し暮らせます。

1987年に重い病を患った際は、
マヌエル・オス・ルイスが病室を取り、
ヘレスで、彼へのオマージュ公演が行
われ、数多くのアーティストが集まり、
彼を支援しました。

痛みのカンテ

アグヘータは45年のキャリアの中
で、13枚のソロアルバムを制作しまし
た。中でもマノロ・サンルーカルの特
集で72年に発表されたデビューアルバム

「ビエホ・カンチ・ホンダ」80年、マドリ
ッドの「コロマ・オ・ソソレ」でライ
ブ録音された「コロマ・ヘレス」伴奏に
よる「エンラ・ソレ」そしてエンリ
ケ・メル・チヨール伴奏で7曲収録さ
れた2001年発売のCDブック「23
キラーズ」が代表作とされます。2
012年にはDVD収録の「ビスト
リア・フレサ、イヴァン・アルデア
アル・ラメンコ」が発売されました。

生まれのロックバンド「スマッシュ
」と、レコードのA面を分け合った、
「ヴァンガ・アルデア・イ・フレサ・デ
ル・フアン・コ・ロドリグ・フアン・コ・
ロドリグ」は、その意（1997年）とい
う、変わったアルバムも残っています。

スマッシュの収録曲はいわゆるフラ
メンコ・フュージョンも含みましたが、
マヌエルの収録曲は、マノロ・サンルー
カルの特集で歌うカンテ・ホンダとし
た。ですから、これは、本音ではなく、
二つのグループのコンビレーション
アルバムになるわけですが、一枚のア



©Paco Manzano

ルバムに、伝統と現代音楽という、水と
油のように相反するスタイルのグルー
プを入れたという。当時としては奇天
烈なアイデアにはきつとマヌエルは
激怒したであろうが、中々、興味深い
ものがあります。

当時の頭が固かったオーディエンス
に響いたと言ふ点では、後にフラ
メンコ・フュージョンに金字塔を建て
た、カマロン・ド・ロレーレスと競演した
「ラレジン・エンゲル・ティエンゴ」(1
979)、エンリケ・モレンテがラガル
ビータ・ニクと競演したオメガ(1



©Comiqua Abal

99年)への果敢な存在になったと
言えるかも知れません。

晩年は、カルロス・サウラ監督映画
「フアン・コ」(1999年)でアルティメ
ーナを披露し、その時の無い原始の
交響の歌で、強烈なインパクトを残し
ました。また、フランスの女性監督ダ
ミニク・アベル自身のドキュメンタル映
画「アグヘータ・カンチオール」(199
9年)には、彼の全てが語られています。
2013年には、ヘレスに「アグヘー
タの像が設置されました。自宅がある
ロタへ続く道の入り口を見つめるその
像を前に、彼は、笑顔で浮かべたと言
います。

そして、真実ファン・カルロス・トロ
が制作した映画プロジェクトによって、
その歌う姿が今も街を彩っています。

数々のアルバムと、少しだけある映
像と、絵と、写真、それらは、その二
度と、彼のあの生きた歌声を聞くこと
は出来ません。けれど、彼が私たちの
心に残した、痛みの熱は、いつまでもそ
こにある。

マヌエルは晩年もフアン・コ・フエ
ステイバルに出演するなど、ステージ
に立ち続けました。2019年、亡く
なるその日まで、マヌエル・アグヘータ
は、他の誰でもない、自分であり続け
ました。その歌も、生き方も。

彼のその頑固一徹な生き様に、背を
向ける人も多かった。しかし、墓一を
れて止まない人でもありました。多く
のファン・オナードが涙を流した。あ
の衝撃は、いつまでも消えることはな
さず。

アントニオ・ソート

Antonio Soto

ギターリスト

「僕は、彼の晩年の17年間、彼の音楽を
動めた。その中で僕とマヌエルは、公
私共に強い絆を築いた。マヌエルとい
ふことは、終わりのない勉強だった。
彼は本物のフアン・コ・ロドリグ。彼の
歌はいつも新しい何かで僕を驚かせ
た。彼がいなくなり、僕は今、彼を亡く
した孤児のようになり、とても心細い。そ
して、心臓を患えている」

思い出は沢山あるけど……。そう
だが、カフエ・チータと、彼は必ずコビー
を頼んだ。それでウニターに、「こ
う言うんだ。フランクを一つでも
ゆつくり、ゆつくり淹れてくれよ。ベ
ルトを緩めて、トーンに懸け込まない
で、いかにゆつくり、マヌエルら
しい音楽。維持したままね。彼は」



エステラ・サタニ

Estela Zanetti

フアン・コ・ギターリスト

「70年代よりフアン・コ・ロドリグにアメリ
カ仕舞いのフアン・コ・ギターリスト、

フアン・カルロス・トロ
 Juan Carlos Toro
 フォトジャーナリスト
 ヘレス出身で、現在、ヘレスの郊外の、
 15kmの町のシンボルとも言うべきフ
 ラメンコなどの画像を拍出するプロジ
 ニング「フレンチマム」を運営中。
 『僕が「フレンチマム」の企画を立
 ち上げたとき、ヘレスを代表するアー
 ティストの中に、アタヘタは絶対入れ
 なければ思っていた。でもみんな、
 マヌエル・デロス・サントスは難しい

人だから無理な言っただけ。そして初め
 て彼に電話して、彼の写真を撮らせて
 欲しいと言って、その写真は後で街角の
 壁一面に映し出される旨を伝えたとき、
 当然のことく、彼は「うー」と言った。
 でも僕はそれでもめげず、もう一度電
 話して、君の友人パコ・トロ（現在は僕
 の叔父だと伝えた）は、彼は態度を軟化
 し、家に来ていいと言ってくれたんだ。
 写真のセッションは二度行わなけれ
 ばならなかった。一度目はシャッター
 をバシバシやると押しただけで、べそ
 面で十分だと言われてしまったから。

その後、彼が電話で、壁はいつになる
 んだと言ってきたので、前回の写真は
 良い物がなかったのでもう一度取り
 直す必要があると伝えた。彼は承諾し
 てくれて、今度は歌ってくれて、その姿
 もとらえる事ができた。
 彼の家は3回ほど訪ねたが、その度
 に、フラムenco界の色々な話をしてく
 れた。でも僕は写真家で、話ばかり分
 からないので、現実に思っただけで、友人
 のパコ・サントス・ムヒカを連れて行
 った。それで、インタビュ―映像も撮
 ることができたんだ。

彼が亡くなったことは、まず友人と
 して、とても深い悲しみを覚える。知
 り合ってから、この人はきっと
 100歳まで生きるんだろ、など、勝
 手に思っていたんだけど、彼の病気の
 ことは全然知らなくて……。そして、
 僕が5年を費やした「フレンチマム」が、
 たマヌエルに見てもらえないのは、本
 当に残念だ。フラムenco界にとって、
 こんな損失はもう二度とないだろう。
 彼の存在が、その才能と純粋さにおい
 て、唯一無二であったように。

フアン・カルロス・トロ 撮影
 © Juan Carlos Toro



©Paco Manzano



「もちろん、まだ巨匠と言われる歌い
 手達は残っているが、マヌエルは、すで
 に星の灯の輝きを残すこのスタイルの、
 最後の代表者だった。彼の死をもつて、
 タラシタなスタイルのカンチの時代
 は、終焉を迎えたと言わざるを得ない
 だろう。私が愛する歌い手達は他にも
 いるが、それでも、あの声がもう存在し
 ないことに、とても深い悲しみを覚え
 る。マヌエル・デロス・サントス・バス
 トール・アタヘタの、あの光かしい、
 終わりの無い怒りと激情の声に。
 私がマヌエルとよく会っていたのは、
 70年代、彼が私の友人のアメリカ人バ
 イラオーラ・ティプと付き合っていた
 頃だ。その頃の思い出は、これと言
 って思い出さないが、もう5年前、彼の
 妹ドローレスがヘレスのフェスティバ
 ルで歌ったときは、よく覚えてい
 る。マヌエルは、自慢の娘の素晴らしい
 舞台を見ていた。私はその喜びで震
 れおちそう全端を見て、こんな人間
 な親父が娘の娘は見たことがない
 と思ったものだ」



©Paco Sanchez

ドミニク・アベル
Dominique Abel
映画監督

彼と喉を焼いた點綴、何かと聞かされたら、私はいつとも書えない。彼の「全て」を知って欲しいからなら、マヌエル・アグヘーが歌う、あの口元。彼は走んでひしゃげて、出ようとする言をいそぐさへもなす。愛想もへつなくれも無い。時に言葉は破壊され崩されて、聞き取れないこともある。だが彼は素晴らしい歌ったときは私たちを揺らえと離さない。そうして私たちは言葉を超える情感の、因われ人となるのを覚える。

この「言葉」こそ、そのリズムで彩られた音のアクサセリに変わってしまう。聴く方は、ヘレス御神の物だ。トルタ、マヌエル・モネオ・ロビッツ、ミビータ、彼らがその証だ。ブラズエラ地区には、今も尚、独特のスタイルが息づいている。

最後は、マヌエルとの思い出で、この追憶文を結ぶのくちろうと思う。マヌエルとの思い出は沢山の思い出、いつかどこかで書かなくてはならないと、いつかどこかで書くのが、一つある



「オ、フアンタムにも同じ世界を回り回って
ジャズやロックも同じく流行する。だからさあ、唯一無二のそれぞ、歌っている。彼は自分の中に響きを探る続けている。それはキイチの中に、傷口から漏れ出ている。そして病みに直面している。ハービーの少ないメロデーの無い、モノトーンなカンサを取ろう。そんなことが出来る。歌い手にはとても多い。」

また、消費社会が作り出す彼らの頑固な性格も、知っておいて損はない。彼の頑固その社会性を決定する態度は、歌手としてのもキイチアに、高い代償を支拂わせる前に、彼に連れ、慕ひ抱かれていた。彼は誰の生まれ変わったでもない。彼は僕でなくなつた。彼は、彼自身の生きた意味ではない。彼はいつともなく人々をも連れて来たといふことだ。

アタババでは、娯楽したアルバムでも自分について書かれた記事も、何一つ持っていないかった。彼の秘密は、全て自分で身藏した。彼は低気圧なキー・キチでありそこへ他を排斥し、自身の手値重視を頑なに貫くその怒りに似たる感情を、まるで天から降った使命のように、一心にかかちて注いだ。

もし、私があの映画を見なかったら世間はこれを知ること出来なかっただろう。彼の行動にはいつも彼独特のやり方がある。作中の観望者ファメンゴなりや方が、僕の側面を通じて、彼と時間の付き合いがありあ

どんな意味もアツグヘーに於いて私にとつて
マヌエラ・アツグヘーは、私に於いては、
説明出来ない。彼がいなくなつて、私
がどれ程、孤獨で、心細いかは、誰にも
分かつてはうえないだらう。

彼のオムレツがわかる人は少ないが、
その中でも、本当にわかっている人は
もつと少ない。しかし私はその一人だ
と自負している。彼と出合ふたところ
私は、臆病不器用な、想像力のかない世
界へトピアを問いた。そしてそこには
モリスが言つた、*「ダイヤモンドの、風
石が眠つてゐた。」*

その生涯で、彼の歌が、十分な賞賛を
得たことは、えない。彼の歌は、詩的に
情熱を待つて彼が受けるべき、さうい
つた情であり、そこには怒りが、燃つてゐ
た。しかしそれは、揺たたら戻つてく
るマヌエラのようには、常に共存する
彼の細さの裏返しであり、はたして、
それを理解した者が、だいたいはいた
らうが、彼の歌は、何度も聴かすけれ
ば分らないのだ。ずっと、心に届く
までは、人は言う。人々はカンチに敵
意を私に負ない。カンチがわからないか

取材協力 石垣隆正

先に……ってマヌエルは特別な人で、普通の人と違っていた。なんて言っているしか分らないけれど、まったく秩序のない、野性的な人間だった。現代の人間ではないからね。野原で狩りとか、殺伐で働いたりして育って生きていた人間だから。一般人として生まれ育っている人とかから彼は全然と異なっていた。好きだったんだよね。彼は雄雌いどね。マヌエルの家ではバレーキーという時代ばかりで、トレイルに載ったときのバカデカイ音がゴゴゴと響のつてくるんだ。それにバカデカイとき、それで彼にチェレタを頼むとき、そのバカデカイの音を耳に刺して「ホラア」って差し出すんだよ。それもさびさびとくらくらの肉の塊をうら、6個割にして、こゝろに落とす。とくに粗野な子で、こゝろでも、時には愛嬌たふぶりにチェステ(笑)話を通してくれたよ。殺伐屋で、雄のチリスちゃんと同じく、このとき、チリスのバリジャのお父さんと、一緒に仕事を始めた時のこと。カネのことを聞くと「この歌は俺の親父が歌った」とかね。

初めてステジで彼の演奏をしたのは17、18歳の頃だったかね。マヌエルの歌はマヌエルトレをはなれ俺のオジちゃん(エルビエ)やマヌエルのお父さん(アグビエホ)ドミンゴ・ルビオの祖父(弟)が歌っていたアグヘルタ、彼に伝わる歌だね。俺はそれらを聞いて育ったんだ。だから彼とステ

—うで海邊するのには自然なことなんかな
よ。

ステイバル、彼の家で演奏した時も素晴らしい歌だった。最近では2015年のヘレスのフェスティバルから、とにかく数々の素晴らしい歌を聞く機会があったよ。

マヌエルと一帯に遇して嫌なことは、俺は一度も経験した。他の所であつたがどうかは知らないけどね。でも演奏前は誰でも彼に近づくかなんか、邪魔の歌う全てを懸けたらダメ。同じ歌の人も、聞く人にも、この前と全く別のもになつてゐた。そう、初めて聞く歌に歌を邪魔しないやつを好んで、自分の準備しているモノを弾くなんて、カンテを伴奏しないマヌエル、モラオ、ノロサセル、カマ、エンリケメルチオール、モラートリとか、ヘレス周辺のカリスターとのために、録音とか放送局の人はすだけれど、彼が求めているのは歌の伴奏のみならず、たつた。だから長いフルセットには必要ない、色々現レターを好まなかつた。短いので良いんだ、カンテの伴奏なんだから。

彼がステージに上ると、観客は皆

本気だったら、パセオ

Paseo フラメンコ

No.386 2016 www.paseo.jp

8

追悼特集

マヌエル・アグヘータ

ヌメロの常識 Taranto

いよいよ来日! イスラエル・ガルバン

エスペランサ・フェルナンデスインタビュー

ヴォダルツ・クララ / 三四郎 / ラス・ミナス・プエルト・フラメンコ

REBAJAS de VERANO 2016



夏セール新作衣装
20%OFF

スペイン1点もの衣装
スライドセール

ワケあり商品
Outlet Sale

サンプル衣装が
スペシャルプライス

その他既製品
Max50%OFF

夏のBIGセール開催中!!

2016.7.9 SAT ~ 8.28 SUN



9 784894 683280



1920373007330

ISBN978-4-89468-328-0

C0373 ¥733E

パセオフラメンコ

2016年8月1日発行(毎月1日発行)通巻386号

定価:本体733円+税